

WEB EXHIBITION

涼味 伝統的意匠とコンテンポラリー・デザイン

2012.8.5 ~

昨年お亡くなりになったテーブルコーディネートのパイオニア的存在だったクニエダヤスエさんには、和のテーブルコーディネーションとして『四季折々 二人卓のしつらえ』というイベントを何度かやっていただきました。



春のしつらえ

秋のしつらえ

クニエダさんのお父様は明治生まれの小説家で、帝劇女優学校の校長も務めた方であり、家では古伊万里と呼ばれる、昔はどの家にもあった器で食事をしていたそうです。ところが本人は若い頃、日本の器には古臭いイメージしか持っていなかったそうです。

しかしあるきっかけで、それががらりと変わってしまったそうです。

クニエダさんのご主人は伝説の VIVO という写真家集団の結成メンバーであり、長い間ニューヨークでカメラマンとして活躍されていた佐藤明さんで、彼女も長いアメリカ生活の中でゲストをもてなすテーブルセッティングに興味を持ち始めたそうです。

その後、夫婦はフランスの星付きレストランを食べ歩き、その間にフランス人のお宅でもてなされた食卓で、自分が小さい頃使っていた古伊万里でお料理が供され、それが華やかなテーブルクロスに映え、とてもシックで素敵に思えたということです。

今まで古臭いと思っていた、呉須で絵付けされた東洋のブルーの器を大切に使っている外国人から、その良さを教わったということでした。

そして帰国後、以前は捨ててしまおうと思っていた実家の古伊万里を自分の食卓にも使い始めたそうです。

アメリカ発の三種の神器と呼ばれる電化製品が席卷している中でのニューヨーク生活、また古くてもいい物はいいと
するフランスでの文化としての食卓との出会い、そして、ご自分のお父様とお母様が大切にこられた日本の伊万里焼。

この三つの巡りあいによって、クニエダさんは洋のテーブルに和の器を組み合わせる事を考えるようになったとの事でした。

和の食卓を洋と合わせて、クラシカルにそしてシンプルに演出させる術を持たれていた貴重な方でしたが、亡くなられた今残念なことにその継承者は存在していません。代々伝わってきた大切なものが、こういう食卓シーンでも失われてしまいました。

大切に伝えてきたことを残すため微力ですが、汐花が考える伝統と今という事で「涼味 伝統的意匠とコンテンポラリー・デザイン」を WEB 上で開催します。



ー 夏の夕餉のふたり卓 ー

夫婦二人でゆったりと過ごす、夏の夕暮の食卓です。

クニエダさん曰く、仄かな蠟燭の灯りが二人の間にあればケンカしないそうです。



まず伝統的意匠の一枚です。

イタリアのジノリとフランスのシャスタニエの白磁をアンダーに、古伊万里写しの二枚の 7 寸縁皿をあしらってみました。

一枚目は染付唐花紋という盛唐時代に伝来した、架空の花紋様です。

オリエンタルな意匠で、下部から上部へと立ちのびる力強い絵付けは、大陸の匂いが日本に上陸したその時代を想わせます。



二枚目のお皿です。こちらも呉須で絵付したのですが、最初に骨描き(こつがき)と呼ぶアウトラインを描き入れ、その空間を濃(だみ)と呼ばれる手法の、太い筆での呉須の濃淡の埋め込み作業で仕上げます。繊細で見事なグラデーションが、この染付双魚紋の跳ね飛ぶ魚の姿をより鮮明に引き立たせています。夏らしいお皿です。



次はコンテンポラリーなデザインのボトルと盃です。

上部に描いてあるようにフラミンゴの絵です。

志村観行という現代作家の作品で、ポップな調子のボディに、注ぎ口には螺旋紋という粋な江戸の意匠が組み合わされています。

こちらも先ほどの染付のお皿と同様に、細やかな顔料の埋め込み作業が、ボトルの肌合いをシックで奥深いものに仕上げさせています。



これぞコンテンポラリーというよりも、オルタナティブな盃と木箱のおしゃれな組み合わせです。

クロスです。大陸の洞窟から自然に浸みだしてきたようなコバルトブルーの肌合いに、薄っすらと浮び上がるような十字がデザインされています。

そしてそれを収める作家自ら作った木箱の素材は流木のようなのです。その流木の木箱と十字架は、遠い時空間を超えて今この時代の海岸に打ち上げられたような錯覚を覚える、不思議な創造ぶつです。



切立の酒盃の周りに、しずくのようなものがデザインされています。

雨垂れの滴のような、ある民族の耳飾りのような、道化の涙のような… 見る人によっていろいろな見方ができます。道化の涙ならば、笑顔を作れば作るほどもの哀しく感じる、遠い土地のクラウンに想いを馳せ、時にはウエットな郷愁に浸りながらお酒を呑むのもいかがでしょう。



今回の箸置き、またはフォークレストに使ったものです。

ガラス作家の山田春美の作品で、用途目的が有り作られたものではありません。

おもわず微笑みたくなるようなフォルムです。

江戸職人から伝わってきた染付のお皿にシェアされたお料理を楽しむのも食卓、こういう小さいものを間に挟んでの会話も食卓。

お二人で楽しんでみてください。



— 銀河鉄道の夜を青海波と銀彩で —

たまにはテレビを消して、宮沢賢治の世界で晩酌を。



まずは、食事とは直接関係ないようですが、これも食卓の一員のガラス絵。

テーブルにある四枚のガラス絵は、宮沢賢治の銀河鉄道の夜から『ジョバンニとカンパネルラの旅』と題し、木版画家の内山良子がいろいろな素材を重ね合わせ、幻想的な世界に創りあげたものです。左上から、<ケンタウル祭の夜> <まっ黒な上着の子供> <鳥を捕る人> <蝸の火>と続きます。

賢治ならではの時間軸を飛ばしながら進んで行く物語は、不思議な登場人物とともに神秘的な不条理へといざない、我々の従来持つ常識を覆していきます。

昔はよく夏の夕暮れ、おじいちゃんが縁台で近所の子供たちに昔話をしている光景を目にしました。たまにはお酒を呑みながら、子供に銀河鉄道の夜でも読んであげればいかがでしょう。



酒器は伝統的な青海波という紋様です。青い波が重なり合うように描かれています。

この意匠はペルシャから伝来したものです。織りのデザインとしてシルクロードを尺とり虫が進むように、長い長い時間をかけて、村から村へと渡ってきたのでしょう。

コミュニンの規模が小さかったその時代、住む世界が違ったとなり村からとなり村へと埋没せず伝えられてきたということは、万人に愛されてきたデザインだということです。

山間部に暮らす人々は海を見たこともなく、この紋様を何に例えて見ていたのでしょうか。

短時間の飛行で、またはインターネットで一瞬にして大陸から大陸へと飛び越えてしまう現代では、知る由もない事なのかもしれません。



現代陶芸家、山本英樹の銀彩プレートです。

番浦史郎という、京都の漆芸家の家に生まれ、琳派風の絵付を愛した方のお弟子さんです。

裏を見れば分かるように、素地は赤土を主とし濃い茶色に仕上げ、その上に銀彩を施しています。暗色のベースに銀をのせることによって、より深みのある輝きを待たせています。

こういう豪華で燻味のある器は、欧米にはほとんど存在しません。

水を打ってけんを添え、新鮮な白身の魚などを盛り付ければ、きらきらと輝きだします。



「分割するかたち 碗(銀)」

造形作家、長江重和の作品です。

卵が割れたように、蓋と身の二つのピースに分割されています。上のツマミと割れ目の形状が、原始期の怪獣の卵のようにも感じさせます。

タイトな高台と、そこから膨らむ丸みを帯びたシンプルなフォルムは現代的なデザインですが、我々に原初的なイメージを与えてくれます。

何を盛り付けるかは、レシピ本や○○料理などと枠組みされない自由な発想で、蓋を開けた時の子供たちの輝く笑顔を思い描きながら考えてみてはどうでしょう。